

令和4（2022）年度 第1学期終業式 式辞

駒場東邦生諸君、おはようございます。

コロナ禍が想定を超えてくることは想定していた、という逆説表現も、すでに使い古した感はありますが、第7波と言われている今の感染状況の推移は、実に恐ろしいと感じます。コロナ禍での3回目の夏になるわけですが、今年は、伝統的な夏祭りや大規模な音楽イベントなど、昨年まで中止になっていた恒例行事も実施の方向で進められているものが多く、いよいよ“ウィズ・コロナ”に向けて社会が動き始めたと感じていましたから、この急激な感染者の増加には戸惑わずにはられません。本校としても、この夏には、2年間中止としてきた霧ヶ峰および志賀高原林間学校と各クラブの夏合宿を実施する方向で準備を進めてきました。今般の急激な感染拡大のなか、これらの行事をどうするか、これは非常に難しい決断になります。もちろん、医療体制の逼迫の度合いなどに常に注目して、厳しい判断を下さなければならない局面が到来すれば、その決断を躊躇しないつもりです。しかし、現段階では、予定通り実施しようと考えています。4月の始業式でも申し上げましたが、現今のコロナ禍への対応においては、置かれた状況と私たちなりの課題とを見極めたうえで、独自の判断を下していく必要が高まってきていることは間違いありません。ですから、この度の判断においても、この夏の行事を、私たちが——この場合の“私たち”とは主に君たち生徒諸君のことを指すのですが——、いかに“自分ごと”として捉えているかが重要になるわけです。諸君が、これらの行事を、自分自身の学びとして自らの人生に位置づけようという意志を持っているか、加えて、日々の健康観察や感染対策の行動に主体性を持って取り組むことができているか、この2点が、本当に大事になってきます。この2点は表裏一体です。君たちの細心の感染防止策への意識が、この夏の活動への情熱を支えるのです。もちろん宿泊行事だけでなく、すべての活動において、日々の過ごし方にひとり一人が十分に留意し、是非この夏を実りあるものとしてほしいと思っています。

ところで、今日の話においては、やはり、先日起きた元首相が襲撃されるというショッキングな出来事に触れざるを得ません。この事件は、こここのところ、当初には思ってもみなかった方向に進んでいますが、心の整理がつかないような衝撃を与えられたということに変わりはないように思います。このことで、少しでも不安を感じるようであれば、友人でも、ご家族でも、私たち教員でも、いずれでも構いませんから、周囲の人に思いの丈を語ってみてください。語ることは、じんわりと私たちを安心に導いていくものです。まずは皆さんに、このことをお願いしておきます。

そして、事件の2日後に参議院選挙が行われました。事件の影響についても様々に取り沙汰されましたが、その一方で、女性の当選者が過去最多28%にのぼったということも話題となりました。28%が“過去最多”であるということはどう評価するべきかは、参院選の結果が出た直後に世界経済フォーラム（WEF）によって発表された「ジェンダーギャップ報告書」の内容をふまえて考えれば明らかです。すなわち、今年のジェンダーギャップランキングによれば、男女平等社会の達成率において、日本は146カ国中116位であり、なかでも「政治」の分野での指数が最も低く、139位であったということなのです。これからの日本社会を考えるにあたって、いろいろと示唆に富むことであると思います。

先日、NHKの「映像の世紀～RBG 最強の女性判事 女性たち 百年のリレー」というテレビ番組を視聴しました。「RBG」とは、一昨年に亡くなったルース・ベイダー・ギンズバーグ米連邦最高裁判所判事の、彼女への敬意を込めた呼称ですが、番組は、彼女がアメリカで2人目の連邦最高裁判事に任命され、その活躍により「アメリカの宝」と称されるに至るまでの、女性の、100年に及ぶ社会との闘いの歴史を物語るものでした。

その歴史の物語は、20世紀初頭のイギリスにおいて、女性参政権の実現のために闘ったエミリー・デイヴィソンの話から始められました。当時のイギリスには、ヴィクトリア女王の長い統治時代から続く、女性は貞淑と気品を持ち合わせた妻となり、夫に尽くすべきという考えが、深く根付いていました。その中で、女性が参政権を得るための闘い

は、現在からは想像もつかないような苛烈を極めるものだったようですが、その実現に向けて時代が一気に動くきっかけとなったのが、第一次世界大戦が始まり戦地に向かった男性の代わりに、女性たちが「ズボンをはいて」工場へ働きに出たことであったということなのです。戦争がきっかけになったというのも皮肉なことですが、1919年にイギリスで初めて女性参政権が認められてから、それが世界の潮流になっていくわけです。

「戦時下に工場で働く女性」と聞いて、私は、先月亡くなった詩人であり作家の森崎和江さんの仕事を思い出しました。終戦後、朝鮮半島から引き上げてきた彼女は、炭鉱で働く女性からの聞き書きをまとめたデビュー作「まっくら」を1961年に上梓するのですが、その中で、元炭坑労働者の女性は「地面の下では神も仏もない、役に立つのは人間の意志だけだ。何でもわが意志で決めるしかない」と語っています。非常に印象深い言葉です。日本においては終戦後直ちに女性参政権が認められるわけですが、女性の労働と、政治参加とのバランスにおいて、世界と日本との間にはどのような違いがあるのか、じっくりと考えてみたいものだと感じました。

ジェンダーギャップ指数においては、「経済」の分野でも日本は121位と下位に位置づけられます。例えば、管理職の数の男女差は、よく離職率の違いが根拠にされますが、女性の離職率が高い理由は、実は「育児」よりも、責任ある仕事を任せてもらえないなど仕事の内容についての事情が大きいといわれます。つまり、差別の結果生じた男女差を理由にして、新たな差別が生み出されているというのです。

ジェンダーギャップについて考えるには、実に様々な側面から社会の成り立ちを検証していかなければならないので、軽々に評価を決めつけるわけにいかないのは当然のことですが、議論を進める必要があることは確かであると感じます。中学3年生（67回生）は昭和女子大との共同企画として、この問題に対する大変興味深いアプローチを行っていますが、その試みが君たちのなかに自然に広がっていくといいなと思っています。駒場東邦は男子校です。その特徴を生かして、タブーなく男性の本音を対象化して、冷静にじっくりと考えてみたいものです。「差別をなくすべきだ」と声高に主張する陰には、むしろ陥穽が待っていると考えます。強く主張することによって、自分を差別していない側に置き、疑うことを忘れてしまう恐れがあるように思うのです。何気ないひと言の中にも差別が潜むことを、忘れたくはないところです。

もう一つ、夏に考えたいことをここに示します。夏は祈りの季節です。アメリカの物理学者ロバート・オッペンハイマーは、第二次世界大戦における原子爆弾の開発・製造計画「マンハッタン計画」を主導し、「原爆の父」と呼ばれた人物ですが、彼の半生を描いた映画『オッペンハイマー』の制作が、来年の公開に向けて佳境に入ってきているそうです。広島・長崎に彼が主導して製造された原爆が投下されてから、ひと月も経たないうちに、彼は核兵器の国際管理の必要性を訴えるに至り、大変な批判にさらされたといえます。いま、まさにウクライナの戦禍において原爆の使用が話題になっていますが、それが実際に投下されることがあってはならないことは疑いを差し挟むまでもないことであるとしても、ロシア大統領の発言をどう受け止めるべきか、様々な立場から考えてみたいところです。

明日からの夏休みを、主体的かつ積極的な活動を取りもどす好機をするとともに、まとまった時間をとってじっくり思索する期間にしてほしいとも願っています。そして、9月に、一段とたくましくなった諸君と再会できることを、楽しみにしています。

以上をもって、式辞といたします。

令和4(2022)年 7月20日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦